

助け合い活動にプロボノとしてどう参加するか

(企画・協力：(認定特非) サービスグラント)

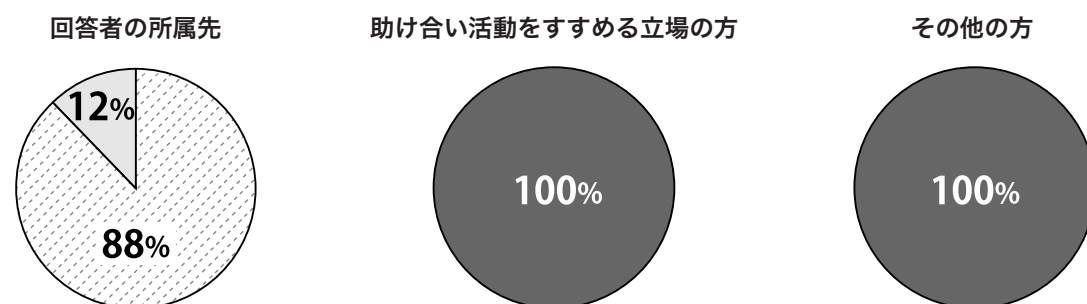
提 言

プロボノとの協働を通じて
団体の課題解決に加えて
地域活動の再評価や、
新たな視点を手に入れよう。

登壇者

【進行役】	嵯峨 生馬氏	(認定特非) サービスグラント代表理事
	猪俣 健一氏	(社福) 阪南市社会福祉協議会事務局次長
	金山 佳子氏	(特非) ここから100代表理事
	森本 健司氏	医療関連企業勤務
	吉田 夏子氏	大阪府介護支援課
	吉村 悦子氏	(特非) 住まいまもりたい理事長・大東市第1層SC

アンケートの結果 参加者概数：40名 回答者数：26名



議事要旨 嵯峨 生馬氏

「プロボノ」とは、仕事で培った経験やスキルを活かした社会貢献活動のことを意味します。

この分科会では、大阪府が取り組む「大阪ええまちプロジェクト」の実績を中心に、企業人等の力を活かした地域づくりについて、地域団体とプロボノ参加者との双方からの発表が行われました。

まずは、プロボノによる支援を受け入れた地域団体2団体からの事例報告がありました。

大阪府大東市のNPO法人住まいまもりたい理事長の吉村悦子さんからは、600人以上の市民を「生活サポーター」として養成し、高齢者の自宅を訪問して身の回りの手伝いをする取り組みを紹介いただきました。プロボノの支援では、地域の民間企業による高齢者向けサービスをまとめたホームページ「知るときゃ安心 大東チャンネル」を構築。多種多様な地域資源を結集し、高齢者の生活ニーズに幅広く応えられるような情報基盤を整えました。吉村さんからは、出来上がったホームページを、大東市以外の地域でも地域づくりの参考にしてほしいとコメントいただきました。

阪南市社会福祉協議会の猪俣健一さんからは、地域の小中学生が高齢者のニーズに応える生活支援サービスを提供する「子ども福祉委員」の活動について紹介いただきました。家族や世代を超えた地域のつながりづくりに大きな効果を生み出すこの取り組みを他市に広げるため、活動をわかりやすく紹介したパンフレットの制作にプロボノと協働で取り組みました。猪俣さんからは、プロボノとの協働を通じて、子ども福祉委員の意義を確認する機会になったとコメントいただきました。

続いて、プロボノ経験者2名の体験談が続きました。

金山佳子さんは、長年の企業勤めののち、介護離職した時期にたまたま「大阪ええまちプロジェクト」の存在を知りました。プロボノに参加したことで、地元地域に目が行くようになり、元気な高齢者が行く場所がない

ことに気づきました。そこで、一念発起し、大阪市淀川区にある自宅を開放して2018年4月に「ここから100」という居場所を立ち上げ、いまでは90歳を超える高齢者から子育て世代まで幅広い人が通う集いの場を運営しています。

医療メーカーに勤める森本健司さんは、同じ会社で働き続けていると人間関係が固定化する中、ふだん出会わない地域の人や違う職種の人たちとつながりを持つ新鮮味が、プロボノの魅力だと言います。高齢者が中心となって農業に取り組む団体の中期計画の策定を支援するプロジェクトや、地域福祉に取り組む団体の成果を可視化するプロジェクトを通じて、仕事では経験できないようなことにチャレンジできるプロボノの価値について触れていただきました。

これらの発表を受けて、大阪府福祉部介護支援課の吉田夏子さんから、住民主体で高齢者を支えていくサービスを充実させるためには、住民主体のサービスの存在を目に見える形で発信していくことの必要性と、実際に活動している団体の課題解決を支援しないと、これ以上の支え合いが生まれてこないという実感をもとに、「大阪ええまちプロジェクト」を立ち上げた経緯についてお話をいただきました。さらに吉田さんからは、地域団体に向けたプロボノ支援では、団体の課題を解決する具体的な成果物を提供できることが大きな成果であるとともに、プロボノのメンバーが入ることによって活動を再評価してもらえる、団体が自分たちの活動に自信を持つ機会になることも見逃せない効果であるとコメントをいただきました。

○大阪ええまちプロジェクト

<https://eemachi.pref.osaka.lg.jp/>

○東京ホームタウンプロジェクト

<https://hometown.metro.tokyo.jp/>

■ 寄せられた声から

- 自分はプロボノを利用したことがあるNPO側であるが、パネリストのみなさんの話を聞いた参加者の中に、自分も仕事以外に何かできるのではないかと意識・パワーを感じた。